



1995.1.1 No. **BURST CITY 15**

For Revolutionary Resistance

400円

A.R.P

ARP
P.O.Box 57
Sakyo Kyoto
606, JAPAN

FAX +81/75-781-1253

ドイツ・アンチファ運動への弾圧 カインドル裁判報告

★事件の経過

1992年4月4日、ドイツ、ベルリンのノイケルン（トルコ人、クルド人などの移民が多く暮らす地区）の中華料理レストラン「金山酒楼」で、ネオナチ各組織の幹部7人が会合をもっていたところ、同レストランに居合わせた反ファシズム運動＝アンチファ活動家8～10人（マスコミ報道）とが乱闘となった。「会合」には、レパブリカーナー（共和党）やDL（国民と祖国のためのドイツ人同盟）幹部の他、ファシスト弁護士K・パガルなどが出席し「東欧へのファシズム運動の拡大」について話し合っていたという。日頃、移民、難民を襲撃し、虐殺しているネオナチに抗議したアンチファ活動家らに対し、ファシストは暴力をもって応え、混乱のさなか、ゲルハルト・カインドルがナイフで負傷し、病院に収容されたものの、数時間後に死亡した。彼は、極右組織DLの支部書記であり、レパブリカーナーの活動員でもあった。

事件後、警察やマスコミは「明らかにトルコ人、あるいはアラビア人の犯行」と断定し、警察に20人からなる特別捜査チームが編成され、大規模な捜査体制がとられた。

とりわけ反ファシズム組織「アンチファ・ゲンチュリック」（訳註）に対しては、狙い打ちの強制捜査がなされた。「同組織は、トルコ共産主義組織デヴリムジ・ソルや、クルド人過激派PKK（クルディスタン労働者党）と連携して活動」と「内定」していた警察にとって、この事件は、またとない弾圧のチャンスであった。メンバーへの強制家宅捜索、密着尾行、手配ポスター掲示、違法捜査が連続してなされ、数週間にわたり、移民やアウトノメ活動家らの多く暮らすクロイツベルク地区一帯に、大量の機動隊が装甲車で常駐した。この時、「容疑者」として数名が拘束されたものの、「証拠不十分」で起訴は断念されている。

ネオナチ組織が発行する機関紙各紙には、DLやそのシンパらが「アンチファ活動家どもの完全な名簿リストを入手した。カインドル殺害に血の報復を！」などと書き立てた。この「リスト」は、警察の捜査資料をもとに作成されたものと見られているが、リストがなぜネオナチに渡ったのか、警察は「未だ不明」としている。



アンチファ・ゲンチュリックのマーク

〈今号の内容〉

《アウトノメ運動特集》

★ドイツ・アンチファ運動への弾圧～カインドル裁判報告★ドイツ・アウトノメからの報告～統一記念行事に反対し暴動と抗議闘争★新難民法に反対し、難民への食料配給事業などで暴利をむさぼる企業を攻撃したローテ・ツォラ声明★ドイツのファシズムを推進するCDU（キリスト教民主同盟）事務所を爆破した反帝国主義抵抗細胞ナディア・シェハダーの声明

★デブリムジ・ソル（革命的左翼／トルコ）指導者の逮捕に抗議して国際連帯行動～DSG（革命的左翼勢力）声明～デブ・ソル声明★7月20日トルコ・ゼネスト報告★ニュース・ブリーフ～ETAの爆破闘争と逮捕攻撃～チリ・デモ隊と警官隊の衝突で発砲～ルフトハンザ機ハイジャック（1977）戦士ノルウェーで逮捕される



Kaindl Duruşmasında İlk Gün !

Berlin'de, 20.9.94'de, yedi anti-faşiste karşı duruşma başladı. Bunların çoğunluğu, „Deutsche Liga für Volk und Heimat“ adlı faşist örgütün yöneticilerinden G. Kaindl'ın „müsteraken öldürmek“le suçlanan genç Türk ve Kürt gençlerini öldürüyor.

Özellikle içeriye alınma sırasında kontroller, oldukça abartılmıştı. Her izleyici ayakta durmaları gerekirken, bazıları oturma yerlerini terk etmemişti. Her izleyici ayakta durmaları gerekirken, bazıları oturma yerlerini terk etmemişti.

Her izleyici ayakta durmaları gerekirken, bazıları oturma yerlerini terk etmemişti.

Her izleyici ayakta durmaları gerekirken, bazıları oturma yerlerini terk etmemişti.

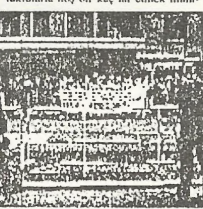
Her izleyici ayakta durmaları gerekirken, bazıları oturma yerlerini terk etmemişti.

Her izleyici ayakta durmaları gerekirken, bazıları oturma yerlerini terk etmemişti.

Mehmet için bir doğum günü şarkısı söyleniyor ve diğer tutuklular da çağrılar ve alkışlarla selamlıyor.

Tutukluların ruh hali oldukça sakin ve dostçaydı, birbirleriyle şakalaşıp konuşuyorlar ve polis sorgulaması sırasında ifade veren iki genç de buna katılıyorlar.

Verilen bir çok ara sırasında tutuklularla hoş bir kaç laf etmek mümkün.



Her izleyici ayakta durmaları gerekirken, bazıları oturma yerlerini terk etmemişti.

Her izleyici ayakta durmaları gerekirken, bazıları oturma yerlerini terk etmemişti.

Her izleyici ayakta durmaları gerekirken, bazıları oturma yerlerini terk etmemişti.

Her izleyici ayakta durmaları gerekirken, bazıları oturma yerlerini terk etmemişti.

Her izleyici ayakta durmaları gerekirken, bazıları oturma yerlerini terk etmemişti.

Her izleyici ayakta durmaları gerekirken, bazıları oturma yerlerini terk etmemişti.

Her izleyici ayakta durmaları gerekirken, bazıları oturma yerlerini terk etmemişti.

Örgütünün, gençlere ve anti-faşistlere karşı bir hava yaratmak için daha neler yapacağını merakla bekliyoruz.

Duruşma, kimlik tespitinin ötesine geçmedi.

Duruşma, neredeyse resmi olarak açılmasından hemen sonra, saat 14:00'a doğru, Erkan'ın duruşmayı izleyebileceği durumda olmaması sonucu ile kesildi.

Erkan, gözde gültüldüğü kadarıyla, psikolojik olarak tınısıyla ancak bir durumda, sık psikolojik etkisi olan ilaçlarla tedavi edildiği izlenimini veriyor.

Uzun süren bir alkış ve „advarlan elen kuvvet“ sloganıyla biriminin ayrıldığı ve karşılıklı olarak „yeniden gelecekiz“ diye birbirine söz verildi.

Her izleyici ayakta durmaları gerekirken, bazıları oturma yerlerini terk etmemişti.

Her izleyici ayakta durmaları gerekirken, bazıları oturma yerlerini terk etmemişti.

Her izleyici ayakta durmaları gerekirken, bazıları oturma yerlerini terk etmemişti.

Her izleyici ayakta durmaları gerekirken, bazıları oturma yerlerini terk etmemişti.

Her izleyici ayakta durmaları gerekirken, bazıları oturma yerlerini terk etmemişti.

Her izleyici ayakta durmaları gerekirken, bazıları oturma yerlerini terk etmemişti.

Her izleyici ayakta durmaları gerekirken, bazıları oturma yerlerini terk etmemişti.

Duruşmaya katılın!

Duruşma ziyaretlerinizi koordine edin :

Berlin dışı için : Duruşma Bürosu üzerinden (694 93 54)

Berlin için : Aşık Perşembe toplantısı, saat 19:00'da,

Mehringhof Blauer Salon'da, Gneisenaustr.2a, Kreuzberg 61

★連続弾圧の始まり

1993年11月13日、事態は思わぬ展開をみせる。この経過は、いままって明らかとはなっていない。この日、17才のトルコ人少年エルカンが、クロイツベルクの警察に自ら出頭した。彼は「精神障害」を患っており、「薬物依存」で治療を受けていた。エルカンは、2週間にわたり、警察で尋問を受け続けた。この時、彼に弁護士は付けられてはいなかった。のちに弁護士が面会に入ってから、彼は警察での証言を中止している。だが、この時までの彼の「自白証言」の内容をもって、警察はクルド人、トルコ人、ドイツ人のアンチファ活動家を次々と逮捕していった。ファトマ (22)、メフメット (32)、アビディン (34)、バズディン (20) が、逮捕、勾留され6名が指名手配を受けた。手配された活動家らは、地下に潜伏することを余儀なくされた。後に勾留中のバズディンが「自供」を始めたが、他の被逮捕者は事件に関して黙秘し、警察への一切の協力を拒否した。1994年4月15日、勾留中にあった5名が、「動機を伴わない共同謀議」による「カインドル殺人容疑」で起訴された。

6月中旬、警察は「逃亡中」のドイツ人、トルコ人、クルド人のアンチファ活動家らをインターポールに国際指名手配要請し、手配写真を公開した。だが当初の「共謀殺人」の手配は、後に「過失致死容疑」へと切り替え

られている。約1ヵ月後の7月14日、トルコ人セイホーが、自らパッサウの警察署に出頭し、ベルリンに移送された。そして6週間後、ドイツ人カルロもベルリン警察に出頭。2人とも勾留中は、完全黙秘を貫いている。

最初の「自白者」、エルカンの病状は悪化し、勾留中に鬱状態に陥り、房内で自殺未遂を起こしている。後に彼は精神医療保護房に移され、一時釈放措置で、一般病院に送致された。

★裁判の開始

9月20日、7人の被告に対する裁判が開始されることとなり、アンチファ戦線の支援が広範に呼びかけられた。第1回公判では、機動隊が大量動員されたものの300人を越える支援者らが裁判所を包囲し、「デッチ上げ攻撃粉碎！」を叫んだ。公判中、被告らはそれぞれガラス製のオリに入れられ、周囲と接触できないよう隔離された。開廷後、裁判長に対し、3個の煙幕弾が傍聴席から投げつけられた。国際人権監視団や、外国のマスコミも傍聴する中、注目の裁判が開始された。公判が重ねられるごとに、警察の不当捜査とデッチ上げが、次々と明らかになった。「自供した」とされるバズディンには、「自白強要」が行なわれていたことが発覚し、裁判所は「バズディンの自供」の証拠採用を却下したのだった。この決定に焦った検察は、ほどなくして、容疑を「殺人」から「傷害致死」に切り換えた。罪状をほぼ認めていた4人の被告らには、有罪判決が12月中にも下される予定である。他の被告は、裁判のギマンと、重刑攻撃を糾弾し、闘い抜いている。事件とは何ら関わりのなかったアビディンは、拘置中の処遇改善申請を行なったが、裁判長エシェンハーゲンは、これを却下した。傍聴席は、抗議と怒りの怒号に包まれた。カメラは、拘置中に看守から暴行を受け、眼球に重傷を負っている。(後に看守が「謝罪」に現れ、コトを穏便にすますよう申し入れたが、カルロはこれに抗議し、2日間の治療拒否で闘った)。

★アビディンとファトマの釈放

10月25日、長期勾留されていたクルド人、アビディンの釈放が勝ち取られた。「アビディンが中華料理レストランでの『殺人』には関与していない証拠が確認できたため」というのが当局の釈放事由である。同27日、ファトマに対しても、同じ事由で釈放措置がとられている。11月1日、アビディンへの起訴が取り下げられた。彼は11ヵ月にわたる不当逮捕、不当勾留を告発する国家賠償請求を行なう予定である。

★事件当時の背景

この4年間だけを見ても、ドイツのネオナチ・ファシストは、移民、難民、ホームレス、「障害者」、アンチファ活動家ら、少なくとも75人を虐殺している。この他、放火、襲撃などは数知れぬほど、行なわれてきた。1991～1992年にかけては、ホイエルスヴェルダ、ロストックの各地で、難民収容所センター襲撃事件が相次ぎ、ベルリンでは、トルコ人青年メテ・エクシが虐殺されるなど、

ファシストによる暴力、殺人は頂点に達していた。

与党内の一部からは、「ヒトラーとドイツ帝国を見直そう」「ユダヤ人虐殺の事実はなかった」「ポーランドの国境を大戦前のラインに引き直そう」などの発言が、公然と登場するようになっていた。マスコミでは、「トルコ人マフィアの暗躍」「ベトナム人の密輸タバコの違法売買」など、反外国人キャンペーンが、警察とマスコミ一体となって展開されていた。

信用できない警察に任せるのではなく、ファシストの暴力から自分たちと自分たちのコミュニティを防衛するために、移民たちが反ファシズム戦線を構築し、アウトノメラと戦線を形づくりつつあった。まさに、「ある意図」をもって、野放しにされているネオナチ、そして反外国人キャンペーンを繰り広げる警察が連携し、ドイツのファシズムが急速な勢いで拡大していたのが、事件当時の状況であった。

ネオナチが移民・難民を殺しても、たいていの場合は「未成年」「酒に酔っていた」として、一般殺人に比べはるかに軽い判決が下されている。今回の裁判では、ファシストの暴力に実力をもって闘った移民に、「終身刑」を最高刑として、以下、懲役20年などの求刑がなされており、ドイツ国家の差別性が明らかとなった。検察の求刑では、被告のトルコ人は服役後に本国送還との補足もつけられている。

★国際連帯行動

裁判当日、アンチファ支援のデモが、2千人の結集をもってベルリンで勝ち取られ、デモ隊が裁判所を包囲した。またドイツのみならず、ヨーロッパの各都市でもアンチファ国際行動として、ドイツ大使館や領事館、その他ドイツ政府関連機関、諸施設への抗議行動が闘われている。

(15ページからつづく)

囲と対峙して最後まで武器とり戦ったアジェンデに対し、赤いカーネーションを供えて追悼した後、7千人のデモ隊は警官隊に向かって投石を開始した。警官隊は、催涙弾と放水車の使用でこれに応じ、弾圧を加えた。

この日の前夜、MRPF（マヌエル・ロドリゲス愛国戦線）による連続的な爆破闘争が敢行され、電柱の倒壊や、国営石炭会社などの破壊が勝ち取られた。また、ピノチェットのオフィスがある軍司令部とサンチアゴの高級ホテルに対して爆破予告の電話が掛かっている。

★フランスでETAに対する弾圧

フランス警察当局は、同国南西部でETAに対する弾圧を行ない、6人を不当逮捕し、230キロの爆薬、ピストル、ライフル、弾薬などを押収した。9月14日、バヨヌに近い山荘を搜索しETA・マドリード・コマンドのメンバーとされるホセ・M・L・ロペスら3人を逮捕し、翌日には他の3人が逮捕された。

★モガディシオの虐殺、唯一の生存者が逮捕される



スペインのバルセロナでは150人、バレンシアでは50人の反ファシズム運動活動家らがドイツ領事館を取り囲み、デモンストレーションを行なった。フランスのパリでは、「アンチファ抵抗連帯グループ」のデモ隊がドイツ大使館につめかけ、またリヨンでは、ドイツ文化センター、ゲーテ・インスティテュートを占拠するなどしている。コペンハーゲン、ベルゲン、トロムソ、ストックホルム、アムステルダム、ロッテルダム、ヘルシンキ、マンチェスター、ニューキャッスル、ウィーンなどのヨーロッパ諸都市の他、ポーランド、アメリカ、カナダでも連帯行動が取り組まれ、「不当裁判粉碎」が叫ばれた。

〔訳註〕アンチファ・ゲンチュリック（トルコ語で反ファシズム青年団）／同グループは、ネオナチの外国人排斥」に対して、断固とした闘いを組織するべく、トルコ人、クルド人青年らを政治的に組織し、アウトノメラと反ファシズムの共闘戦線を構築していた。

ノルウェー警察当局は、ソラヤ・アンサリ（41才）の逮捕を発表した。1977年、4人のパレスチナ・コマンドたちは、ドイツのルフトハンザ機をハイジャックし、獄中にあるRAF（ドイツ赤軍派）のメンバーの釈放を要求した。と同時にドイツ国内では、ドイツ雇用協会の頭取であるハンス・マルティン・シュライヤーを誘拐するなどの多面作戦を展開した。モガディシオ空港（ソマリア）に着陸していた同機を、ドイツの特殊部隊GSG-9が襲撃し、アンサリは重傷を負い、他の3人は虐殺された。ハイジャックの報復としてドイツ権力は、RAFの政治囚、グドゥルン・エンスリン、アンドレアス・バーダー、ヤン・カール・ラスペはスタンハイム刑務所の独房で虐殺され、イルムガルト・ミュラーは重傷を負わされたのであった。ソマリアで20年の刑を受けたアンサリは、後に国外追放となって以来、地下に潜っていた。ドイツ政府は彼女を裁判にかけけるために、ノルウェー政府に身柄の引き渡しを求めている。

〈ドイツ・アウトノームからの報告〉 統一記念行事に反対し暴動と抗議闘争

大ドイツ帝国の再来を阻止せよ!

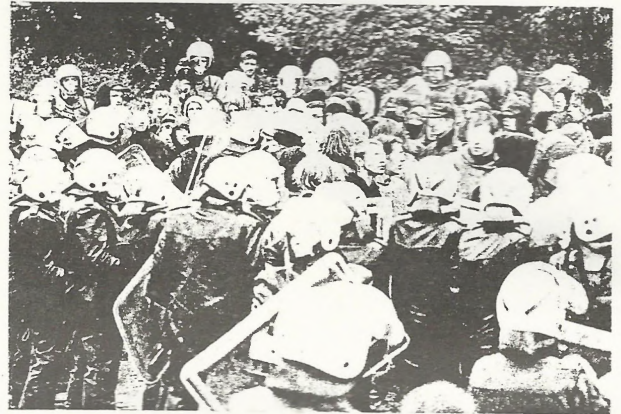
「東西ドイツ統一」の日の10月3日を前後して、各地で統一記念式典が開催された。毎年、政府主催による統一式典が、各地方都市を巡回して催されている。今年はドイツ北部の都市、ブレーメン市が選ばれた。同市での「ドイツ統一フェスティバル」開催にあたり、ドイツ権力者どもは、すべてを平穏無事に事を運ぶべく、準備万端整えていた。だが、万策尽くした周到な準備にもかかわらず、左翼アウトノーム青年たちは、ドイツ再統一4周年を祝うべく企画されたナショナリストの豪華な見せ物を、粉碎したのである。

フェスティバルの一週間前、ブレーメンの内務当局は、10月1日から3日まで、市内でのデモ、示威行動の一切を禁止する通達を出した。この通達に対し、市民グループやアウトノーム活動家らが「通達取り消し申請」を地元の裁判所に何度も提出したものの、裁判所は禁止措置を支持する判断を下した。左翼が街頭に登場することを許さない状況をつくり出すべく、あらゆるデモ、示威行動の禁止措置がとられ、そのみならず活動家個人に対しても、警察の弾圧が加えられた。反原発運動関連の書籍を扱う書店が家宅捜索を受け、電話とFAXが押収された。そして10月2日の日曜日、警察は地元活動家の集会になだれ込み、家具やコンピューターを破壊したうえに、70人を逮捕した。翌日の禁止されたデモを強行させるべく、戦術を練っていた、というのが逮捕事由とされている。この弾圧に抗議し、約300人が、ブレーメンの商店街で暴動戦を夜通し繰り広げた。数件の商店の窓ガラスが割られ、スーパーマーケットが略奪を受け、少な



反動資本のスーパーマーケットへの暴動・略奪戦闘も行なわれた

「統一式典粉碎」を掲げ、アウトノームのデモ隊は機動隊と激しく戦闘。首相コールは、「哀れなニヒリスト集団による式典妨害を許さない」と表明。流行語となる。



くとも10台の高級車が燃やされたのであった。

数時間後、ドイツ各都市からのアウトノーム部隊が、次々とブレーメンに到着し始めた。裁判所によるデモ、示威行動の禁止措置を受けて、警官2千5百人以上が市内の各通りに配置された。国境警備隊BGSとマスクで顔を覆った特殊部隊SEKも投入され、放水車と機動隊が、禁止されたデモの出発予定地点周辺を封鎖した。警察の大量動員にもかかわらず、仲間たちはブレーメンの中央駅近くに集まることができた。デモ隊は、たちまちのうちに1500人を越えた。そして女性とレズビアンของกลุ่มを先頭に、記念式典会場へ向け、進撃したのであった。そこでは、首相コールや何百人もの政治家、資本家たちが「大ドイツの4年」を祝っていたのだ。

約2時間後、この最初のデモは解散し、そして驚くべきことには、警察が撤収したのである。おそらく、会場周辺の警備を固めるためであったと思われる。この機会をとらえ、数百人の仲間たちが直ちに再結集し、ブレーメンのビジネス街に向かった。道すがら、選挙広告引き裂かれ、商店の窓は割られていった。機動隊が再投入されるまでのスキをみて、覆面をした青年グループがデモ隊の前面に進み出て、商店、銀行を次々に襲撃していった。ドイツ銀行の前では、2人の私服刑事が打ち倒され、携帯していた無線機が破壊された。全体で12人以上の警官を負傷させた。警察部隊が動き出すまでには、すでに数十万マルク以上の損害が生じていた。最終的に警察の暴力によって、3人のデモ参加者が負傷し、274人が逮捕されたが、夜までに全員の釈放が勝ち取られた。だが被逮捕者には、今後、「非合法デモへの参加」の罪状で起訴攻撃が予想される。

会場への非合法デモと、小規模ではあったが、ブレーメンの銀行街での強力な暴動戦闘に加えて、アウトノームは、政府が後援する市中心部での「国民フェスティバ

デモ弾圧のため、機動隊・国境警備隊等2500人が投入され、ブレーメン市内は厳戒体制に置かれた。



ル」をも粉碎したのである。拡声器が音量いっぱいに響き、小さいながらもデモ隊は、反ドイツのスローガンを叫び、ドイツ国旗を燃やしながら、街の広場を取り囲んだ。機動隊の介入という無駄な努力は、現場の光景を一層哀れなものとした。広場には多くの群衆がいたため、機動隊は身動きがとれなかったのである。実際に機動隊ができたことと言えば、フェスティバルを見物にやって来た旅行者と、「善良なるドイツ人家族」を蹴散らしたぐらいである。フェスティバルが、混乱する惨状の真っ直中、大統領ローマン・ヘルツォークは教会で燈火していたが、この時、警察は警備を一層強化させていた。大統領が教会から出てきた時、群衆に紛れていた活動家らがシュプレヒコールを浴びせ、爆竹を投げつけた。私服刑事約40人が、群衆めがけて突撃し、辺り一帯は混乱に陥った。「反ドイツのカオス集団」の引き起こした混乱によって、全てを妨害された大統領は、ブレーメン訪問をそこで切り上げ、早々に逃げ帰ったのである。

政府当局は、この粉碎闘争が闘われたことを覆い隠さんとしたが、「暴動と粉碎闘争、また悪天候が、『ドイツ統一の日』に水をさした」と主要新聞は報じたのだった。あらゆるデモ、示威行動は非合法を宣言され、デモ隊よりも警官隊のほうがはるかに数を上回ったにもかかわらず、アウトノーメ（紙上では、ニヒリスト、犯罪者、暴力的ゴロツキ集団などと表現されているが）が、抗議と粉碎行動を成功裏に貫徹したのである。統一フェスティバルの組織と、この警備のために拠出した高コストに加えて、ブレーメン市の役人どもには、ゴミの清掃のための50万マルクという余分な出費が残されたのであった。

ベルリンでも1500人のデモ

10月3日のドイツ再統一記念日、政府の式典がブレーメンで行なわれるため、アウトノーメ活動家たちは多くがブレーメンへと向かったが、ベルリンでも、統一反対のデモが持たれた。このデモを呼びかけたのは、A s T A（ドイツの全学連に相当）やP D S（民主社会党／旧東ドイツの政権党の系譜をひいた政党）、そしてもちろん、アウトノーメとアンチファ諸グループである。

以前はベルリンを西と東に隔てていた壁、その各所に

設置されていた検問所の一つである「チェック・ポイント・チャーリー」跡には1500人の人々が集合した。出発したデモ隊の先頭を機動隊の車両が規制し、歩道では機動隊が並進規制を試みるが、デモ隊は車線いっぱいには広がって進んだ。解散地点であるオペラ座前では、トラックによる架設のステージが設営され集会が持たれる。終盤になるに従い、機動隊との小競り合いが始まり、衝突で数人が逮捕された。「一応」集会も終わり解散するが、アウトノーメを中心とする参加者たちの行動は、これだけでは終わらない。

集団でアレキサンダー・プラッツ駅方面に、機動隊とぶつかりながら移動する。駅広場では、統一記念のイベントが行なわれて出店に群がる人々に混雑していた。この中で、機動隊はデモ参加者を包囲するように布陣し、異様な空気をかもしだしている。その時、人々が一斉に空を見上げた。広場にそびえ立つ高さ 365メートルのテレビ塔の上に、統一反対などのスローガンを書いた横断幕がひるがえっていたのだ。この日予定されているテレビ塔からの政府主催のバンジージャンプに時を合わせて、集まった人々に効果的なアピールを行うことが出来たわけである。

ベルリンでのデモ

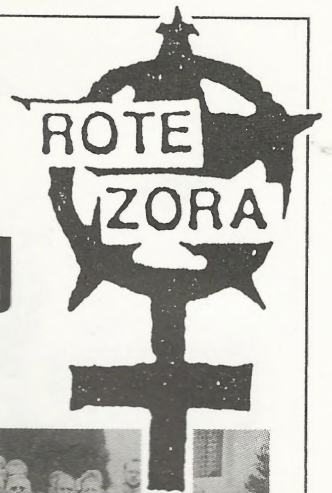


新世界秩序の下での国連「コロシウム」



2000/10/10

差別的な難民法に反対し 難民から暴利をむさぼる企業を攻撃 ローテ・ツォラ 6.12 声明



ネオナチがここドイツにおいて、またも日常的出来事であるかのように行進し、攻撃、殺戮を行なった。あたかも嫌悪と懺悔に満ちあふれる政治儀式であるかのように。人種主義者の登場は、単に国家や警察によって容認されただけではなく、また彼らが呼びかけに応じ、要望されたからというだけではなく、まさに彼らの究極行為 - 「殺人行為」が、偶然のできごとではなかったということを、ゾーリングゲンでのような事件が意味している。ゾーリングゲンでは、殺人集団ネオナチ組織が結成され、動員された。国家機関の援助のもと、彼らは逃げる必要などなかった。その結果、5人のトルコ人女性、少女が死んだのだ。人種主義者の登場は、外国人・移民問題への新政策の正当化に一役買うものだった。難民に対しては、あらゆる非人道的処遇も許されてしまう環境を作ってしまったのだ。

ハンガーストライキ、デモシストレーション、国家への陳情、食料パック配給の拒否やこれの窓からの投棄などの行為をもって、富のシステムから締め出された女男の難民は、食料パック支給に抗議した。(亡命申請者には、かつては毎月の現金支給があり、若干の買い物、食品購入などができたが、この制度は廃止された。現在は現金の代わりに必要な食料が現物支給されるのみとなっている。訳註) 彼らがあとにした国々では、生活の手段が全て強奪されたが、彼らはこの国でもまた人種差別に満ちた特別処遇を通じて、さらなる破壊と攻撃と闘わねばならない。彼らは、1993年11月1日から機能し始めた特別法と闘っている。この法は実に、彼らに「低品質」の人間とのレッテルを貼り、人間的存在のための権利を否定するものであった。

ドイツのパスポートのない女性、子供、男性の難民が、存在できる程度の最小限の収入基準から選別、除外されたのは、戦後ドイツの歴史において初めてのことである。

★特別法による難民政策の実態

ドイツの大地で悲惨のうちに過ごさねばならない収容所生活を送る難民たちは、常に壁、フェンス、警備員に囲まれている。東欧、アフリカ、アジアの民族・人種戦争、権力闘争、破壊、社会構造の崩壊による見通しなき未来から逃れて来た彼らは、この地では経済難民や人口過剰などとして焼き討ちにされる。これらは特別法によって裏打ちされているのだ。難民出身国の入管政策は、富める国の体制や銀行によって運営され、枠組みが決定される。すなわち中央集権を通じ、「新世界秩序」を強

ゾーリングゲンで焼き殺された
トルコ人移民の葬儀



制するものであるのだ。これら世界の荒廃させられた国々の民衆は、長きにわたり、支配権力から「過剰人口」として扱われてきた。(「地球規模の人口危機」「人口爆発」など…)

この地でなんとかうまく成功をおさめた者にも、政治、イデオロギーが強要され、逃げることはできない。この地にやって来ようとする難民を脅し、耐えがたき苦悩を強制するために、特別の法律が練り上げられ、強制送還措置を「すみやかに実行」に移せるように準備万端整っている。ボスニアでの戦争から逃げのびてきた難民は、奇特な個人が、彼らへの滞在費を負担しますと申し出た時にのみ、その滞在が可能となる。新たにこの地に辿り着いた難民には、いわゆる難民福祉法により、福祉援助の基準が限定的に適用されることとなった。この法律は「福祉援助」という屈辱のシステムを作り上げた。(配給券、中古衣類、強制洗濯…) 全ての生命活動と需要を満たすことが、貨幣と不可分一体のものとして存在しているこの世界において、とりわけ現金交付の停止は、苦悩をもたらすものとなろう。これは難民が慣れ、親しんできた習慣のもとに生活したり、他とのコミュニケーションをはかり、社会生活について話し合ったりする一切の行為を不可能にさせるものなのである。結果、全ては役人の人種差別的裁量に委ねられることとなる。経験やアドバイスを互いに交換しあったりするのを妨害するものであり、また、弁護士にも何らの支払いもなされなくなってしまうことも意味している。つまり難民が持ちえる法律上の可能性の全てを封殺せんとするものなのだ。

医療もまた極度に削減、限定されることとなった。激痛や生命の危機にかかわる病気、または伝染病の時のみに限って治療措置が施されるが、慢性疾患、栄養不足、拷問、戦争による負傷、(性的)暴力などに起因する長期疾患に対しては、何らの措置も施されない。誰に、い

かなる処置がなされねばならないのか。すべては役人の独断、望むまま、それ次第となった。現金の不交付は、時給2マルクの強制労働で補われるが、この労働を拒否する者には月ごとの交付（子供40マルク、大人80マルク）の資格を失うことを結果させることとなり、その先には常に強制送還が見越されているのだ。

なんとかして3ヵ月以上滞在することのできる者にとっては、もはや仕事を探すのはそれほど困難ではない。だが、これらの仕事とは最低、最悪の賃金労働である。つまり難民に与えられた労働とは、西欧の人間誰もがやりたがらない仕事であるのだ。新たな（不当極まりない）亡命申請法によってもたらされた「滞在権」によって、さらに多くの難民が、絶望的な状況のゆえに、家族レベルで違法な状態にさらされることとなるのだ。これは、難民の地位を、より一層不安定にするばかりか、難民がさらに飢え、難民の住居が欠乏する事態をもたらすこととなるのだ。多くの女性は、この地に暮らしたいがために、違法なセックス商人どもの手に、自らの身体を委ねる選択をせざるをえない。

女男の難民が唯一獲得できた成功とは、ケルンやフライブルクで今、削減されはしたものの、福祉補助が最低1年ドイツに滞在していた難民に限って再び支給されるようになったぐらいのものである。

他の補助を実施するには、さらなる赤字の増大と官僚組織を必要とするため、いくつかの都市は部分的な妥協の道を選択する方向のようだ。以上の理由からして、ハンブルク、カッセルなどの他の多くの都市では、援助提案の受け入れを拒んだのだった。難民の非人間的な処遇が、政治的事柄とされたために、ドイツの滞在期間の長短を全く無視して、福祉援助法制化原則を「全ての」難民に拡大適用させるという新提案がビルツェーレ（バーデン・ヴュルテンベルク州内相／訳註）によって出されたのだ。これこそ断固として阻止されねばならない！！

★難民から利潤を吸い上げる企業

フード・デリバリーは、アイデア商売、新たな市場として、高利益が期待される。宅配品の市場価値は、市当局が支払うよりかなり低い値に設定されている。包装、運送などにかかるコストは、すべて難民にのしかかってくるのだ。難民は、加入している社会保険を実際には50%しか受け取れない。

利潤は、配給される食事の質を落とすことでも上げることができよう。商店で期限ギリギリまで売られていた古く、腐った食品が、難民の食料配給品に充てられる。この「生ゴミ」を食べるのを拒否した難民は、善良なるドイツ人から、「恩知らず」と呼ばれるのだ。

ババリア出身の企業家エルベルト・ヴァイグルこそ、女性、子供、男性の各々の難民への食料品の配給のビジネスで巨額の暴利をむさぼる張本人なのだ。ニュルンベルクでは、ババリア州にいる難民への食料、住宅供給業務の独占ビジネスをヴァイグルが行なっていた。ヴァイグルは、旧東独でME I GO社を通じて安価な果物や野菜を生産することで利益率を高めている。ME I GO社

（ゲラ近郊とベルリンに設立）は、ザクソニー、チューリンゲン、ブランデンブルク、ベルリンの難民に優先的に供給を行なっている。また、ノルトライン・ヴェストファリア州などの各地方州でも同様である。現在のところヴァイグル／ME I GO社は、2万人の強制援助のもとにある難民（94年3月発行のレポート）を市場として、利潤を吸い上げている。ババリア州ヒルハイットではヴァイグルは精肉事業も行なっている。他の系列子会社、ライプチヒのOGEVA社が、食料配給パック用に、缶詰を供給するかたわら、子会社のアイゼンヒュッテンシュタットのCANTOP社が金属製缶パッケージを供給するといった具合だ。

加工食品のパックは、女性、子供、男性の難民に屈辱を与え、暗鬱を強制する。難民収容キャンプでの暗鬱なる住宅状況（フェンスと警備員、コントロールシステムへの出入り、キャンプ内部の者のみ許されている面会）といった状況では、彼ら難民は与えられたものしか食べることができない。これ以外の選択はない。自分自身によるコントロールや自身の責任性の確保といった、最後の望みすら破壊されてしまう。

難民施設、収容キャンプでの食料配給の実施は、強制サービス以外のなにものでもなく、精神病棟や監獄で行なわれていることと、何ら変わらないのだ。阻害と屈辱の砲火が、自己責任と自己意識の活動を阻むために企図され、また抵抗を封じ込め、命令に従わせるために、社会的経験を最小限に留めることも計画される。非人間化を容易に成し遂げるべく、民衆の権力依存、官僚機構による大衆管理化へ向けて、永遠なる「変革」が遂げられつつあるのが、ドイツの「完全」とされるスタイルである。難民たちは、タイプ打ち担当係どもや、食欲なビジネスマンどもにとっては、やっかいな問題を持ち込んでくれた存在でしかなかった！！ 食事の準備や食事そのものは、社会とは不可分のものである。我々が食すもの、それを用意する者、いかに用意するか、どこで、いかに食べるのか—これら全ては、性別による労働の分断、社会的技術的破壊、阻害であり、他方では剥奪行為も伴いしつつ、我々自身の習慣、伝統、社会構造などに関わっている問題である。



ネオナチは、鏡に映るドイツ社会そのもの



★女性難民への搾取構造

世界中のほとんどの社会では、男権家父長制度の下、女性が家庭の子孫維持活動を担わされている。そして子供の面倒を夫が見ずに、全て女性が世話し、責任を負っているというのが当然となっている。

特別法は、性的に中立ではない。いわゆる「難民福祉法」は、とりわけ女性の難民を意識して導入されたものである。

無意味で強制的な福祉サービスは、意識的に家族への福祉供給をより一層困難なものとし、女性にとっては重荷であるのみだ。また強制された収容生活での女性の家事労働をつくり出し、子供を持つ女性におなじみの、超過労働と精神負担を増加させるものなのだ。

調理済みの食事と、食料配給パックは、また文化服従でもあり、女性の伝統生活スタイルと家事労働を背景とするゆえにこそ、女性の自己意識と自己認識の収奪、破壊であるのだ。そしてこれは、これまで承認されてきた友好関係を阻害し、同じテーブルでなされてきたコミュニケーションや社会的相互関係をつくり出しえないのだ。

特別法は、男権家父長制度に基づく、暴力的諸関係の維持、再形成を補強するもの以外のなにものでもない。収容キャンプの状況ゆえに、女性は人種差別に満ちた諸施設（入管システム）や、その象徴たる機関、施設と同様に、男性の存在により一層の依存を高めねばならなくなる。男性による攻撃が、もはや食事や家族のために責任を負う役割を実行することのできなくなった女性に対して向けられるようになる。生活の状況、女性が逃れることのできる場所の不在、女性の友好、連絡施設の不在、これらは女性の状況を耐えがたいものとするのみなのだ。

性暴力、脅迫、威嚇、レイプは、日常茶飯事だ。言語や福祉サービスなどの問題は、女性の隔離をさらに増大させるものとなるのだ。食品を買いにいくことすらできない仲間を呼んで、集まったりもできなくなってしまう。社会生活を構成する男性にとっては、家庭を省みることなく、どこでも自由に行き来できるし、別の方法で稼ぎ口を見つけるのも容易であろう。最低の賃金の労働、例えば清掃、売春、物乞いが女性にとって唯一、可能なのだ。

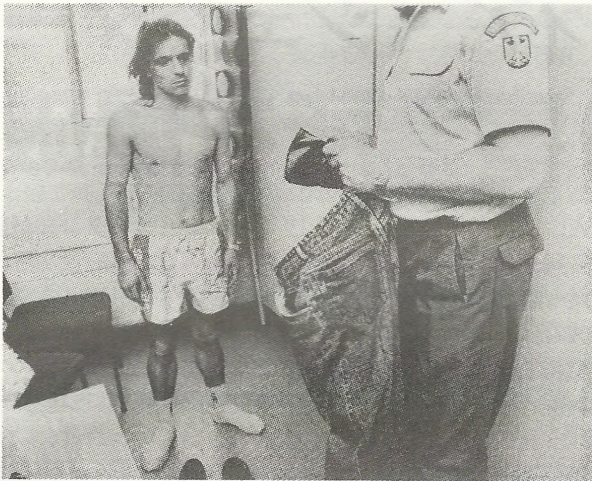
難民の女性たちの抵抗、闘いは、まず社会的家事労働

や社会的諸関係の変遷といった問題に関係している。恐怖と収容所生活で、徹底的に破壊された女性たち自身にとっては、利用的価値の基準や性的価値付け、暴力行為や服従を突破していく闘いは、生命と人間的存在のための闘いなのだ。

終わることなき難民迫害や、家なき者や障害者への襲撃を根幹とする国家の難民政策は、戦後ドイツ史が社会的偏見に満ちた未知の王国へと突き進む、さらなるステップである。人種差別、性差別、社会的攻撃、資本主義による新たな男権家父長制システムから成立している権力は、人間の価値を生存する権利の価値基準で計り、これらの人間が必要な存在であるのだと選定するのである。都市部においては、過剰人口に分けられる者の生存権が、公然と議論の対象とされる。そしてこれらの人々には「特別処遇」をもって取り組まねば、と正当化されるようになっていく。難民に対する特別法は、政治の一般形態の継続であり、それがもたらしたものと、高齢者、障害者、病人、貧困にあえぐ者を孤立化せんとするものである。例をあげれば、この法の強制するものは、搾取の現状－失業と貧困の拡大－の先鋭化である。いわゆる第二労働市場（解雇に何らの保険、保障のない環境での労働）の拡大と、その合法化を許すものなのだ。この状況が、ドイツの市民権を持つ女性と同様に、移民に対しても効果を発揮することとなろう。と同時に、この地に暮らす非合法移民が就労できる労働の領域が（売春、東欧女性の売買、清掃労働、ブラックマーケットでの取り引きなどを深化させつつ）非合法（「第三」）労働市場として拡大していくのだ。男権社会構造が再生産されつづけ、ましてやその土台をさらに確固としたものとせんとする中であって、女性には更なる性暴力と性的搾取が強制されている。女性搾取構造の高度な形態は、とりわけ旧東独地域において、害毒この上なき搾取関係を、セクシャル・ハラスメントなどを伴いつつ職場において女性に強要し、また男性への経済的従属関係をもたらしものとなった。男性は、女性やレズビアン解放運動の、性暴力への反撃の闘い（例えば『虐待の虐待』など…）に対抗すべく、組織化しつつある。（「過剰人口」とされるゆえに）不法滞在者、戦争難民、新たに亡命申請を求めてきた者であることの恐怖は、彼らが巨大な搾取の待つ、第二、第三労働市場に直接的に向かわねばならないことを意味している。支配権力にとっては、最も歓迎すべきことである。たいていの場合、給与システムによって、これらの人間は何ら攻撃力となるわけでもないし、だからこそ、このようなシステムをもって支配権力はドイツの巨大な経済的地位を再び安定させることができるし、多くの人々がこれを受け入れているのだ。いわゆる「多元文化主義者」と呼ばれる者たちでさえもだ。

★人間選別の管理基準

社会における新しい法、新しい規範は、過去の福祉制度、保険制度を解体し、重病患者、障害者、高齢者、薬物依存者、ホームレスにてきめんの効果を発揮している。



「働かざる者、食うべからず」、すなわち金なき者は生きる価値のなき者なのであり、少なくとも長生きは許されてはならない存在とされる。安楽死 — いわゆる死へのアシスタント — や生命の価値基準に基づく優生思想は、現在もはや議論の段階にあるのではなく、実際に行なわれ、またそこには、社会的要求があるのだ。世界に健康かつ安定的に子供を、との要求に基づく出産管理システムの女性への強要、そして女性自身の「健康」を守るためになされる管理、これこそ子孫繁栄価値基準としてあるものののだ。

- 避妊治療行為強要に関する新法
- 高齢者や医療を必要とする人間の殺戮と抹殺
- 新生障害児の「生存権」に関する議論
- これらの基準の法制化を狙う、いわゆる倫理委員会

これらは全て「生きるに値するかしないか」の価値基準によって、人間を選り分ける人口政策のパズルの1ピースである。管理の風潮が、ドイツをアウシュビッツへと導いた時と同じように、再度、社会的に承認され、具体的現実となりつつある。

搾取、貧困の増加とともに人種差別、反ユダヤ主義、性暴力、搾取が、同様に増大している。男権的資本主義権力関係を再構築するために、白人、非ユダヤ人のドイツ国民は、自らの特権を防衛し、性的、人種差別的暴力を肯定して、社会の権力分割に加わらねばならないのだとされる。— 白人として、そしてドイツ人として自らの何を守らねばならないのかを認識しているのだ。

支配権力は、一般大衆と同様、失業問題、住宅問題、福祉不正受給などは難民が原因なのだ、と声高に叫んでいる。そしてこういった主張が右翼ナショナリストを一層強化させるものとなり、また社会的コンセンサスの再編と再構築に手を貸すものとなっている。

難民収容施設、新法、強制福祉制度に反対するキャンペーン活動、強制送還と入管施設に反対する闘い、教会などのように駆け込んで逃げることでできる場を組織する、といったような様々な行為を通じて、この社会の少数的存在者が、性的、人種差別的、反ユダヤ主義的コンセンサスを、打ち破ろうとしている。

我々は、この助力となるべく、6月12、13日の夜、ニュルンベルクとマイリッツ/ゲラにあるヴァイグル/ME I GO社の運送車輛数台に対し、断固とした怒りを叩きつけた。

ヴァイグル/ME I GO社、あるいは同様の稼業の者どもよ、難民の苦しみにつけ込み、暴利をむさぼる行為を即刻停止せよ!!!

我々は以下の女男の難民の要求を支持する。

- ▷「我々は人間的存在を求めるのだ!」
- ▷「食料配給パック制度と大規模福祉制度を廃止せよ! — 公的福祉金の全額支給を!」
- ▷「福祉でなく、現金補助を!」
- ▷「医療サービスの欠如に抗議し、全ての者に平等な医療を!」
- ▷「中古衣類配給に反対し、全額福祉補助受給を!」
- ▷「強制労働反対! 一般労働への就労禁止措置撤廃!」
- ▷「人種差別に基づく難民福祉法廃止!」
- ▷「全ての入管収容所廃止!」
- ▷「人種差別に基づく送還基準反対! — 全ての者に滞在する権利を!」

男権的資本主義の完遂と価値基準を排除し、除け者とされる人々の存在する権利を! すべての女性、子供、男性の難民の滞在する権利を!

ローテ・ツォラ

1994年6月12日

(10ページからつづく)

ある」とし、「ドイツ人(!)の出生率低下の抑止を希望」する、ドイツ国家に「憲法擁護のための積極的運用を」などと書き連ねている)

地方に配置されている、党の実際の活動拠点たる地方CDUの地方支部、事務所を攻撃せよ!

「武装行動と戦闘性の、多く、様々の形態が、異なった政治的、社会的対立の現出する現場に、登場することとなろう。これは、RAFや(RAFの)獄中者が語ろうと、語るまいと、そんなことには関係なく起こることなのだ」。

(ヘルムート・ポール/RAF獄中者 1993年8月)

5月25日に開始された、国家が証人のハイディ・シュルツ公判を阻止せよ!

ファトマ、メフメット、アビディンに挨拶と連帯を! 我々に失うものは、何もない。ともに闘わん!

反帝国主義抵抗細胞 ナディア・シェハダー

反帝抵抗細胞ナディア・シェハダー CDU(キリスト教民主同盟)事務所を爆破

さる6月と9月に、デュッセルドルフとジークブルクのCDU(キリスト教民主同盟)事務所とブレーメンのFDP(自由民主党)事務所に対して、連続爆破戦闘が敢行された。デュッセルドルフとブレーメンでの戦闘では、「反帝国主義抵抗細胞ナディア・シェハダー」が声明を発表した。同細胞は、自らをRAF(ドイツ赤軍派)の遊撃共闘組織と位置づけ、「議会連立政権をもってドイツを支配せんとするCDU、CSU(キリスト教社会同盟)、FDP、SPDの政治政策に対する抵抗闘争」を掲げた武装闘争を展開している。またジークブルクのCDU事務所攻撃戦では、「反帝国主義抵抗細胞バルバラ・キスラー」が声明を発表し、「11月15日にフランクフルトで開始されるRAF獄中者ビルギット・ホーゲフェルト(昨年6月バート・クライネン駅で逮捕。現場にいわせたRAF兵士グラムスは、対テロ特殊部隊により虐殺されている。本紙7号に詳細記事)の裁判に圧倒的支援を」と呼びかけている。今回は、6月4日にデュッセルドルフのCDU事務所爆破戦闘を敢行したナディア・シェハダーの声明を掲載する。

デュッセルドルフ／CDU事務所攻撃に関する声明

1994年6月4～5日にかけての夜、まさに欧州議会選挙の一週間前のこの日、我々はデュッセルドルフのカイザースヴェルサー通り93番地のビル棟裏に、4個の爆破装置を設置した。このビル一帯には、デュッセルドルフのCDUが、「ベルギッシュェスラント」ーゾーリンゲン、ヴッペルタールなどーの地方事務所と同様の事務所を構えている。我々は、人的被害が最小限となるよう考慮した結果、この場所を選定した。この戦闘をもって、我々はCDUと、また同党に代表される政治政策についての公開討論の開始を求めるものである。

パレスチナ、クルディスタン、トルコのいかなる地域にあっても、CDUに率いられたドイツ国家が、現在も戦争を遂行している。ドイツは主要な帝国主義国家として、これら諸地域の支配権力者の側に立ち続けてきた。この現状の受け入れを拒む戦闘的同志らによって闘われている闘争は、自由と社会主義への闘争である。

『これからは、PKK(クルディスタン労働者党)に対する我々の立場は、より厳しいものとなる。PKKは、これからどこへも自由には行けなくなるということを覚悟せねばならない』。

(連邦内相カンター／CDU 94年3月20日)

人、ニルギン・イルディリムとベドリエ・タシュが自ら宣したごとく、彼女らの解決法を導くことを促すものだった。2人はドイツ国家に抗議し、3月21日(ネヴロズの日)に、自らの身体に火を放ち、焼身決起したのだ。ニルギンとベドリエの残した声明には、支配権力デミレル／チルレル一味への、ドイツ製武器売却について述べられていた。これら武器援助については、最近、数々の議論がなされてきたが、なによりもこの間の事実が多くを物語っている。三つの援助協定(1990～1994年)の下、レオパルドI型戦車100両、BTR60装甲兵員輸送車300両、ファントム戦闘機30機、対空高射砲131門、MTW-M-113自走砲187台が、これまでに送られた。1985～1991年にかけて、ドイツ国家はカラシニコフ突撃銃25万6千丁、機関銃5000丁、戦車用弾頭10万発、弾薬4億4千5百万発を供与している。4月7日、政府はトルコへの武器援助を一時停止したものの、5月4日には、この禁輸措置は再び解除された。4月15日には、ドルニエル社からスティンガー携帯型地对空ミサイル212門が送られている。帝国主義諸国が、その従属的關係に基いた同盟を通して軍事的次元を展開し、構築するために、1993年、アメリカ合衆国は932両の戦車を、またドイツは追加85両の戦車を、トルコに送ったのだ。言い換える



この発言は、マンハイムに暮らしていた2人のクルド

ドイツ政府はクルド人の運動に激しい弾圧を加えている

ならば、トルコは現在、イギリスが所有するのと同数の戦車を、1年間のうちに手にしたことになる。クルディスタン解放闘争に敵対する戦争を遂行するため、現在、正規軍50万人、兵役従事者（いわゆる村落警備兵）5万人が、13の地方州（国家非常事態宣言地域）に配置されている。かの地での戦闘勢力に對置せられた戦争と、この地での弾圧攻撃は、密接にリンクしている。1993年11月26日、連邦内相カンター（CDU）は、PKKとクルド関係諸組織に、活動禁止措置を発動した。3月末だけに限っても、ドイツではクルド人574人が逮捕されている。一方、首相コール（CDU）は、クルド人によるアウトバーン高速道の封鎖を「外国人に与えられる諸権利の、容認しがたい不正使用」と表現し、強制送還命令書にサインし、これが確実に実行に移された。先週のザールブリュッケンでのGSG-9（対テロ特殊部隊／訳註）要員を含めた警察特殊部隊による急襲攻撃は、現在遂行されつつある一連のドイツの政策を明確に示すものであろう。3月7日、デュッセルドルフの法廷で4年以上も続いた裁判の結果、アリ・アクタス、ハサン・ハナリ・ギュレルの2人のクルド人に終身判決が下された。ミュンヘンでは、4月12日、トルコ領事館占拠（93年6月24日）に加わったクルド人13人の裁判が開始された。この闘いを通じて、トルコへの武器援助の中止を、首相コール（CDU）に公衆の面前で宣言させるべく、クルド人たちは要望したのであった。クルド人戦士たちは、「抵抗することは、すなわち生きることである。＝ベルホエヴェダン・ジャネ」との自身の信念を抱いて、行動に決起した。

「トルコが唯一の民主的、自由市場的イスラム国家である」。（ラメルス／CDU 連邦議会外交政策担当スポークスマン）

ドイツもまた、1982年から闘われているトルコ共産主義勢力による抵抗闘争に対する戦争を担う党としてあるのだ。1983年、すでにデヴリムジ・ソル（革命的左翼＝トルコの戦闘的共産主義組織／訳註）に活動禁止措置が発動され、ドイツに政治亡命を求めていた戦士や活動家らが頻繁に強制送還されていた。「アンカラ・リセリ・デヴリムジ・ゲンチュリック」の創建メンバーの一人、ジェマル・アルトゥンは、自らの身体がファシスト軍事政権（1980年9月のクーデターにより掌握）に引き渡されるのを拒み、ベルリンの裁判所の窓から飛び降り（1983年8月30日）、その時のケガがもとで死亡している。

「トルコへの強制送還措置は、ドイツでは年に数百件もあることだ。外国人への処遇に関する我が国の法に依れば、この措置は普通のことである」。（内相カンター／CDU 議会での発言）

BND（ドイツ治安当局／訳註）と、トルコ秘密警察（MIT）は、緊密な協力関係があり、トルコ送還後の人間をトルコの空港で即座に逮捕することができるのだ。



また、MITはドイツ国内においても、「逮捕」活動を遂行している。例をあげるならば、1986年、デヴリムジ・ソルのメンバー4人が、ドイツで拉致され、アンカラへと移送されている。

トルコの監獄での拷問は、噂に名高い。拷問は、法廷においてもなされている。5月1日のメーデーの日に、横断幕を房内で掲げたとして、7名のデヴリムジ・ソル獄中者が、イスタンブールの法廷で殴打された。またカイセリの法廷でも、同組織の獄中者5名が警棒で殴りつけられている。この数年間だけでも、一斉逮捕作戦の際に、多くのデヴリムジ・ソル戦士らが、ドイツ製武器で武装し訓練されたトルコ治安軍により射殺、殺害されているのだ。我々はとりわけ、1993年3月6日の強制家宅搜索事件について言及せねばならない。この時、トルコにおける共産主義闘争の発展に偉大な貢献をしたベドリ・ヤガンとギュルジャン・オズギュルが、虐殺されている。

HDW社、Tyssen社、Krupp社、クラウス・マッファイ社、ヘッケラー&コッホ社、ローデ・シュヴァルツ社、これら一連の企業は、トルコへの武器売却に手を染め、利益をあげている。政治分野で、こういった企業の利害のもとに政策を遂行するのが、CDUの義務なのだ。5月30日、連邦政府は、ビジネスグループBDIに対して書簡を送り、NATO諸国外への武器売却規制が、今後緩和されることとなる旨、申し述べていた。スーダン＜飢餓により数百万の難民が、常に死の危機にさらされている国＞への商品セールスに関して、「取引引きは万事成功した」なるコメントを発表したダイムラー・ベンツ社のような企業は、多くのドイツ企業の共通の利害関係と、CDUの政治家たちの個人的コンタクトの内に相互関係が築かれ、結びついている。この例には、フォン・ヴァルテンブルグ（BDI代表）と、シェーザー

(D I H T代表)が、コールの選挙チーム参謀であることから明らかなのだ。シュティール、ネッカー、ミュルマン、いずれも現政策が、次期政府においても変わることなくさらに引き継がれ、推進されることを望んでやまない連中どもなのだ。

CDUとドイツ経済の集権化された指令システムは、党や企業の政策を調整する際、これをさらに容易にせんとするためのものである。CDUの権力中枢がコールであり、そのアドバイザーチームが、(アッカーマン、ボール、ファイファー、ルードヴィヒら)が名をつらねる「朝食会」である。ドイツ経済の権力中枢は、ドイツ連邦銀行の13人の頭目である。これらの輩は、100社以上の重要企業を、一手に監督している者どもだ。大銀行はCDU/CSU/FDPの政治政策の下、手厚く保護されている。

220億マルクの利潤をあげる連邦銀行には、嬉しいことこの上ないわけがあるのだ。(シュナイダー氏が記者会見で述べたように、自身が帳消しにせねばならなかったのは500億マルクという、彼にとってはまさに「ハナクソほどの金額」だったという所以である。)もちろんドイツの屋台骨たる大企業は、ある一党のみを支持せず、CDU、CSU、FDP、SPD(社会民主党)など、何ら実際には大差ない大政党のすべてに献金している。1992年においてだけでも最も多額の献金をおこなった企業をあげるならば、CDUにはダイムラー・ベンツ社、CSU(バイエルン州でCDUとの連立与党/訳註)は、バイエルン金属工業社、FDPにはノルトライン・ヴェストファリア金属工業社、SPDにも同じくダイムラー・ベンツ社の名が並ぶ。しかし、シャーピング(SP D党

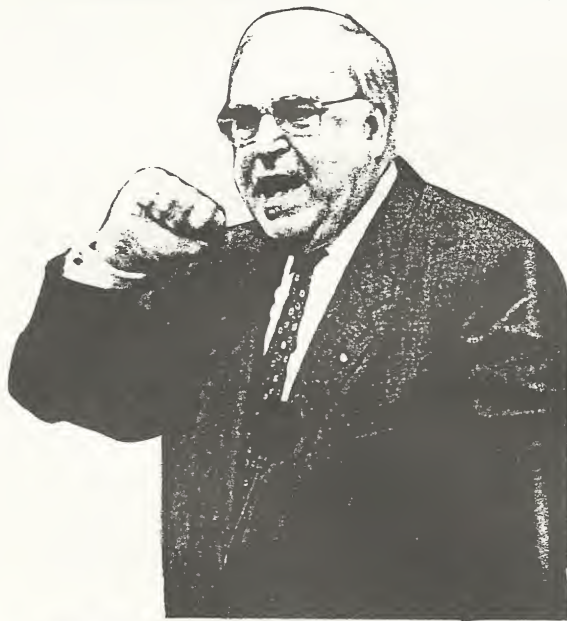
首)が富ある者を自分の側に引きつけることができなくとも、同党の経済政策担当者が、キンケル(FPD党首)とうまく地位を分け合う役割分担を行なっている。

「SPDが、赤いベニヤ板のハリボテで着飾ったCDUのようになるのなら、元の姿にこだわっても仕方がなくなることだろう」。

「春に種を蒔けば、10月に収穫の見込めるものじゃないとダメなのだ、と私は答えよう」

(CDU党首コール/ヴァチカンに向かうドイツ大使邸にて 1994年5月3日)

コールは、手前勝手な見通しを、その楽観主義の基礎に据えている。すなわち1994年のドイツ経済は、15パーセントの成長を見せる、とするものだった。とりわけ外国からの諸要求が、彼らを儲けさせたのだった。例えばバイエルン社が「利潤を上げるために2000人分の職が必要なくなった」と報告すれば、これは相乗効果を生み出す結果をもたらす。現在、ダイムラー社の株がシンガポールの市場で取引引きされ、ドレスデナー銀行が、メキシコやポーランドなどに支店を開こうとしている。別の言い方をするなら、銀行や企業の、国際規模での拡大は、順調に継続されているということである。旧東ドイツ<資本の85%が、西ドイツの手の中にある状況>に資本が拡大して以降、東欧(ポーランド、ハンガリー、チェコ共和国)が、次に飲み込まれる場所となるのだ。同時に12年間におよぶCDUの支配は、社会分裂をもたらしている。現在のところ、失業者は800万人(再教育化研修中の者も含む)であり、220万人の子供たちが、飢えに直面し、少なくとも250万人に、住宅が供給されねばならない状況である。職場のリストラの結果、今年に限ってだけでも、電気産業では3万人、鉄鋼産業では2万3000人など、あわせて約10万の工場労働が消滅すると予想されている。CDU政府は、民営化実行計画に沿って、これを一層強化せんとしている。さらに3万5000人の鉄道労働者が、年内にも解雇される予定だ)1994年末までには、少なくとも50万人の失業者が出ることを、政府はすでに見込み済みなのだ。ドイツの人口のうち、約60%が、現状を憂慮している。とりわけ、不確定雇用制への危惧が高まっている。ドイツに暮らす大多数は、この雇用制度の厳しい結果の直撃をうける。大資本家が望めば、いつでも全国規模で工場を閉鎖、削減できるのだといった事態を、鉄鋼労働者はEKO製鉄社での例を通して経験した。1989年には、1万1000はあった職が、現在はわずか3000に削減されている。Krupp社がまず、会社を引き継ぐのを拒否し、Riva社もこれに続いた。デュッセルドルフで1949年にCDUが政権に就いてからこのかた、全ては資本家エリートどもの利害に基づいて、大衆の大部分を動員するという、その手法が何ら変わった訳ではない。特権エリートの党を公然と自認するFDPは、それゆえに全得票数の5%(議会で必要とされるギリギリの得票率/訳註)しか獲得出来てこなかった。これに比して、CDUは、固定支持者(サラリーマン層、



CDU

現代のドイツ・ファシズムのコーディネーター、CDUのコール首相

ネオナチによって焼き討ちされたトルコ人移民の住宅
警察は移民の「安全」を保証しない



自営業者ら）以外にも、潜在的支持基盤を獲得していた
「民衆の党」であった。

「バート・クライネンでの対テロ活動に関する事実の
一切は、すでに明らかとなった。我々は1994年に、犯罪
防止に関する法律を制定した。我々は、BKA（連邦刑
事局）とBGS（国境警備隊）の意向のもとに活動し、
亡命申請問題を改善し、暴力集団PKKの活動を禁止し
た。国内の安全に関する計画は、承認されている。こ
ういうのこそが、私がやりたかった方法だ」。

（連邦内相カンター／CDU 4月末のインタビュー）

ドイツにおいて、失うもの多き人々 — すなわち人口
の大多数 — に対し、CDUは国内、国外の安全を提供
する党として、自身を売り込んでいる。国内問題に関し
て言うならば、この安全という言葉の意味するものは、
超満員の監獄、警官の増員、警官だらけの街角、名誉あ
るお巡りさん、警察と治安情報調査部の垣根の撤去等
である。ザクソニー州で上程された「ドイツ中で最良かつ
最も近代的な法律」（内相カンター）とされる、新警察
法とは、14日間の初期拘留手続きと、電話盗聴に関する
規制を簡素化するものである。民間警備員、警備会社が、
この安全ヒステリーから、利潤をあげている。28万人を
有する警備業界が、自動車を、地下鉄を、空港を、ある
いはまた別の施設を、「守って」いるのだ。安全に関す
る、CDUの国外政策に眼を向けてみよう。なにも戦闘
機ユーロファイター2000の開発のみを指しているのでは
なく、これを一機1億2000万マルクで購入することも含
まれていることを覚えておかねばなるまい。（国防相リ
ューエ／CDUは、同機を含む戦闘機140機を購入する
意向を示している）西ヨーロッパ連合諸国をとりまく安
全の壁は、5月5日をもって現実のものとなった。（ポー
ランド、ハンガリー、チェコ共和国、スロヴァキア、
ブルガリア、ルーマニア、バルト三国は、この「安全」
の圏域から除外）。以前は結ばれていたノルウェー、ア
イスラント、トルコとの同盟関係が、再評価されつつあ
る。

ソマリアなどの国に、干渉行為を行なえるだけの緊急
展開部隊に、兵士5万人を拠出できるだけの充分な国力

が上記の国にはないので、今のところ表だった動きは見
られない。なぜ充分な力がないかと言えば、「これまで」
は中欧での軍事行動を目的として軍が編成されていたた
め、おそらく砂漠地帯の人々の要求に答えるには相応し
いものではなかったからだ。

「我々ドイツ人は、現在、再び運命づけられた社会へ
と移行しつつあるのだ」。

（ドイツ大統領ヘルツォーク／CDU 雑誌インタビ
ューで）

1979年以来、CDUは常に連邦大統領府にありつづけ
た党である。わけてもリヒャルト・フォン・ヴァイツゼ
ッカー（CDU）は、ドイツ大衆から、特に尊敬を受け
ていた人物であった。デュッセルドルフとエッセンで銀
行家として働いたのち、1958～1962年にかけては、イン
ゲルハイムのベーリング・ケミカル社でナンバー2と
して活躍した。同社はダウ・ケミカル社にダイオキシ
ン売って、利潤をあげていた企業だ。このダイオキシ
ンは、ベトナム戦争での「エージェント・オレンジ（枯
れ葉作戦）」に使用された。ヴァイツゼッカーは、「ドイ
ツ福音教会派」の最高位に就いてもいた。（1964～1970
年）あるコトを、別のコトへと結びあわせる技術に長け
ていた彼にとって、ドイツ大統領のポストを手にしたの
は、決して偶然の出来事ではなかった。そして1984～19
94年にかけて、彼が行なってきたこととは、すべてこの
ような手法で進められたのだ。丁寧で洗練されたキリス
ト教者の話法を身につけたヴァイツゼッカーによる、強
大ドイツの殺人帝国主義ビジネスの実践を、世界中の何
千万もの人間が賞賛した。今年の5月25日、ローマン・
ヘルツォーク（CDU）が、彼の後継者として、2500万
マルクを投じた大統領就任セレモニーで任命された。ヘ
ルツォークの経歴は、ナチ・ファシスト、マオントと深
く関わりがある。彼はマオントとともに学び、ドイツ憲
法に関する著書を共同で出版している。マオントは、フ
ァシスト政党DVU（ドイツ国民同盟）のリーダー、フ
レイに、法的助言を頻繁に行なっていたことのある人物
なのは周知のことだ。フレイの発行する「民族新聞」の
1982年の記事中に、「ヘルツォーク博士の他には、ドイ
ツの高等司法裁判所を率いることのできる人物はいない」
とあるのも、とりたてて驚くことではないかもしれない
だろう。1987年、ヘルツォークは、ドイツ連邦憲法裁判
所の長官に就任した。そして大統領選挙の候補者となる
以前に、フォーカス誌とのインタビューで、「今はなき
友、マオントの好んだ政治形態を、最良のものとして支
持する」と明言している。

「ミスター・ドイツ憲法氏が、『ドイチェ・フォルク』
（＝ドイツ国民）について語る」（フォーカス誌）

「ワイマール憲法のほうが、むしろ言葉的には良い言い
回しだった」「起源をたどれば、かつては一つだったド
イツ人…。ドイツ人となりたくない者には、その決断の
時間をしばらく与えようじゃないか。そして最終的に、
ドイツ市民たることを拒む決断を下した者には、我々は

こう言うべきだろう。『どこへでも、あなたが故郷だと思える国に、どうぞお帰りになればいかがですか』と」。

(—ヘルツォークの発言)

このヘルツォーク版の「外国人は出ていけ！」<アウスレンダー・ラオス！>のスローガンは、この5年間のCDUの政治発展の舞台背景に見られるものであった。

1989年、CDUの7年間の政治の結果として、社会的分極化が極度に進行した。いわゆる革命的左翼が、原則的かつシステムティックな、反資本主義のオルタナティブとして運動を発展させることよりも、むしろ自身のことばかりかかづらっていた間に、ファシストグループらが失業問題や住宅問題の、人種差別的「解決策」のスローガンを叫ぶこととなったのだ。『アウスレンダー・ラオス！』—外国人は出ていけ！—ファシストのこの煽動は、成功を収めた。レパブリカーナー（共和党＝極右政党／訳註）は、1989年1月のベルリン市議会選で、7.5%を獲得し、1989年6月の欧州議会選では、7.1%も得ているのだ。1989年9月、プレーメンでの党大会でCDUは、「必要な結論」を引き出した。レパブリカーナーとの連立を提起したルンメル（CDU）によって導き出された解決に代わって、反外国人政策を中心にレパブリカーナー支持者がCDUに、心地よく受け入れられるよう取り計らう決定がなされている。国防相リュエは、党総書記にガイスラーを再任した。リュエは、反移民政策を着々と遂行するため、CDU各地方組織の体制固めを進めた。このようにして、ドイツ連邦憲法第16条（亡命申請権保障規定／訳註）の変更の道が作られていった。1989年11月9日以降、CDUは、まさに「民族の党」として誇示していくための攻勢に出たのだ。そしてその絶頂を迎えた1990年の選挙で、成功を収めたのだ。1992年、難民がドイツに入国する際、最初の3ヵ月間を強制的に収容するためのキャンプが、ドイツ各地に建てられた。リュエのキャンペーンは、絶大な効果を発揮した。彼は、街頭にのさばる人種主義者と、CDUの党的政策を取り持つ、一種の「労働部門」を構築したのだ。『事態が悪化しないために』なる、自分に

都合のいい予言を行なったCDUは、ドイツへの亡命申請権の廃止を成し遂げた。憲法改悪のための投票と、ゾーリンゲンでのファシストによる放火殺人が、1993年5月の同じ週の出来事だったということは、偶然ではないのだ。

「ドイツへの移民の現在のレベルは、国民を成功裏に統合できうるラインである」。(オルデロック／CDU 1994年5月12日、マグデブルクでの、人種主義者による外国人排斥事件に関する議論で)

1993年11月1日以降、CDUは人種差別に満ちあふれた別の法律を立案、上程している。すなわち「難民福祉法」である。現在、難民はドイツ人の受ける生活保護のレベルの80%しか受けることができない。さらには、この給付が、屈辱的な食料パック支給や配給券などの形をとりながらなされているということだ。ドイツ連邦憲法の改悪以来、強制送還者の数は、爆発的に増大した。ベルリン市内相ヘッケルマン（CDU）は、1994年1月には、送還者は6倍になった、と報告している。5月1日、ドイツの、未曾有の規模の送還処遇措置へと向けた第一ステップが踏み出されたのだ。1万人のクロアチアからの難民が、送り返されることとなった。クロアチア政府が2万人のイスラム教徒難民のボスニアへの送還を正当化したのと同様の行為だった。

「我々ドイツ人には、一つの民族たる感覚が、今再び求められている」。

(連邦内相ショイブレ／CDU)

CDU／CSUの議会内会派代表であるショイブレは、実質的に党のナンバー2であり、ポスト・コール時代を射程に据え、準備を進めている。1993年のベルリンでの党大会の席上、「保護され、そして運命づけられたドイツ社会」と「我らがドイツ、父なる国」の概念の下、党の今後の方針を明らかにした。CDUは、まさに1993年のドイツ帝国主義党としてあるのだ。党の各代表団は、このイデオロギー方針を歓迎し、拍手喝采を送った。この方針によって、ショイブレのみがレパブリカーナー支持者の身近な存在となったというばかりではない。これはまた、コールの去った後、残される70万人の党員を統括することとなるイデオロギー的方向を保障するものでもあるのだ。ショイブレは、「交渉のカギを握る人物」となった。最初は、旧東独政府との統一合意問題で、続いてはSPDとの憲法に関する交渉（亡命申請条項について）であった。だが彼は、プラグマチストの駆け引きに長けた政治家というだけではない。CDUの党イデオロギーを、効果的に体现できうる、党内の逸材的存在でもあるのだ。

これらの一切は、ウケのいい資本主義政治屋どもの要求（工場生産における、さらなる労働時間延長要求等）や、反動的ファシストらの提起を集大成した256ページの分厚い彼の著書の中で、明らかとなっている。（彼は著書で「ドイツ人（!）」の家族は、ドイツ国家の根本で（9ページへつづく）



東欧から持ち込んだタバコを安く販売するベトナム人達が、今、警察とネオナチから集中的な攻撃を受けている

News Briefs

★スペインの将軍をETAが爆殺

7月29日、スペインの首都マドリードで、ETA（バスク祖国と自由）はスペイン軍のフランシスコ・ベギリャス将軍（69才）の乗った乗用車を爆破した。将軍と、同乗していたボデーガードと運転手が死亡し、近くにいた数人の警官と治安警備隊員が負傷している。この闘いは、政府の政治囚に対する「社会復帰計画」に反対するものであった。この計画は、ETAの政治囚が、暴力を非難し、ETA指導部に闘争を放棄するよう呼びかけた場合、刑務所から釈放されるというものである。同時にこれは、ETAだけでなく、右翼テロ組織GALの服役者の獄中待遇をも和らげるものでもある。GALは1980年代に、20人以上のバスク独立運動の活動家を殺害している。

爆発直後の現場の様子



★マラテヤ刑務所で警官隊による銃撃

トルコのマラテヤ刑務所で獄中処遇の改善を求めて闘いを続けるデブ・ソル（革命的左翼）の政治囚たちに対して、刑務所当局は特殊警察部隊を導入し殺人的弾圧を加えた。8月16日、特殊警察部隊はマシンガンを乱射しながら、囚人たちの立てこもる第7監房区に突入し、壁に3メートル近い穴を開けて、催涙弾を撃ち込んだ。囚人たちは、鉄パイプで殴打され、一つの監房に全員押し込められた。この後、看守たちは各監房に侵入し、囚人たちの書籍、カセット、旗、ラジオ、タイプライター、現金等を強奪したのである。これに抗議して、囚人たちは無期限のハンストを開始した。刑務所の外でも、家族たちによる連帯のハンストが12日間にわたって行なわれた。

★BR（赤い旅団）の容疑者、逮捕される

イタリア当局は、8月17日にタマロ・マルチェロ・デロモ（28才）を赤い旅団の容疑者として逮捕した。デロモはナポリの北に位置するカタルセ南部の両親の家にいるところを不当逮捕されたものである。当局は1989年から、破壊活動等の容疑で彼を指名手配していた。赤い旅

団は1970年代から80年代初頭にかけて武装闘争を展開し、1978年のモロ首相誘拐と殺害の闘いで注目を浴びた。大半のメンバーは、現在公判中であり、中には武装闘争を放棄した者もいる。

★組合加入求める労働者を経営者が警察に売り渡す

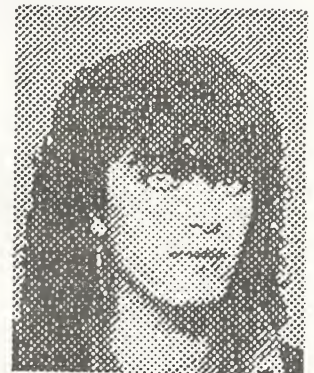
8月22日、トルコのイズミールにある織物工場「トゥルコ」の労働者75人が、「組合に加入した」との理由で解雇された。労働者は同日、工場を占拠した。経営側は交渉にあたり、「組合加入に何ら問題はない。一階に組合の関係者が待っている」と嘘をつき、労働者を説得した。ところが、待っていたのは警官隊で、労働者は殴打され5人が逮捕されたのである。24日から労働者たちは抗議のハンストを始め、民主諸組織の支援が開始された。

★ETA容疑者の追放に反対してデモ

8月24日、3人のETA容疑者の国外追放に抗議して、ウルグアイのモンテビデオの空軍基地の周囲でデモが行なわれた。4千人のデモ隊は警官隊と激しく衝突し、これに対して警官隊が実弾を発砲したため、4人が死亡し数十人が負傷し逮捕された。このETAの3人の容疑者は、2年前に入国しようとした際、旅券の不備を理由に逮捕されていたものである。3人はウルグアイへの政治亡命を求めて、国外追放される当日までの13日間にわたりハンストを続けていた。結局、深夜になって国外追放は強行され、軍用機でスペインに到着した3人は刑務所に収監されたが、依然ハンストを続けている。

翌日には、フランスでもETA容疑者が逮捕されている。18才の時からバスク独立運動に参加している、逮捕されたイレネ・I・L・リアーノは、ETAマドリード・コマンドによって遂行された23の攻撃に関与した容疑をかけられている。

イレネ・I・L・リアーノ



★クーデター記念日に警官隊と衝突

チリのサンチアゴにあるアジェンデ元大統領の墓のある墓地周辺で、9月11日大規模なデモ隊と警官隊との衝突が起きた。この日は、アジェンデ政権を倒したピノチェットによる軍事クーデターの21周年にあたる。軍隊の包（3ページへつづく）

デブリムジ・ソル^(トルコ革命的左翼)指導者の逮捕に抗議して国際連帯行動

軍事法廷でのドゥルスン・カラタシ

トルコの革命組織『デブリムジ・ソル（革命的左翼）』（通称デブ・ソル）の指導者ドゥルスン・カラタシが、9月10日にイタリアからフランスへ入国しようとしていたところをフランス当局によって逮捕された。9月12日には、逮捕されたモデーヌからテロ対策担当検事のもとへ送致された。同日、トルコ政府は、カラタシの身柄のトルコへの引き渡しを要求したが、現在のところフランス当局は、トルコで死刑に処される可能性が高いことを理由に、受け入れていない。

デブ・ソルは1978年に創設された革命組織で、武装闘争を行ない、将軍、政府高官、米兵など多数を殺害した。また、マラテヤの山岳地帯でゲリラ戦も行なっている。1980年の軍事クーデターでは、カラタシなどが逮捕されて、37人の殺害容疑で軍事裁判を受ける。カラタシはイスタンブールの刑務所を1989年に脱獄するが、1991年の欠席裁判で死刑の判決が出ている。ドイツ、トルコ、オランダなどの国で指名手配されていた。

トルコ当局はデブ・ソルに対して激しい弾圧を繰り返しており、1992年4月17日のイスタンブールで行なわれた大弾圧では、デブ・ソルのメンバー11人が射殺され、6人が負傷し逮捕された。（詳細は1993年3月発行の本紙4号を参照のこと）この時にカラタシの妻であり、中央委員でもあったサバハト・カラタシも射殺されている。カラタシの身柄がトルコに送致されれば、処刑されることは確実視されている。

激しい武装闘争を展開しながらも、トルコのみならずヨーロッパ各地で大衆戦線を構築しているデブ・ソルは、カラタシの逮捕直後から大規模なキャンペーンを開始した。逮捕後一ヵ月間の抗議行動を以下にまとめる。

【トルコ】

9月11日／イスタンブールのサグマリカル刑務所で、デブ・ソルの政治囚 119人がハンストを開始。

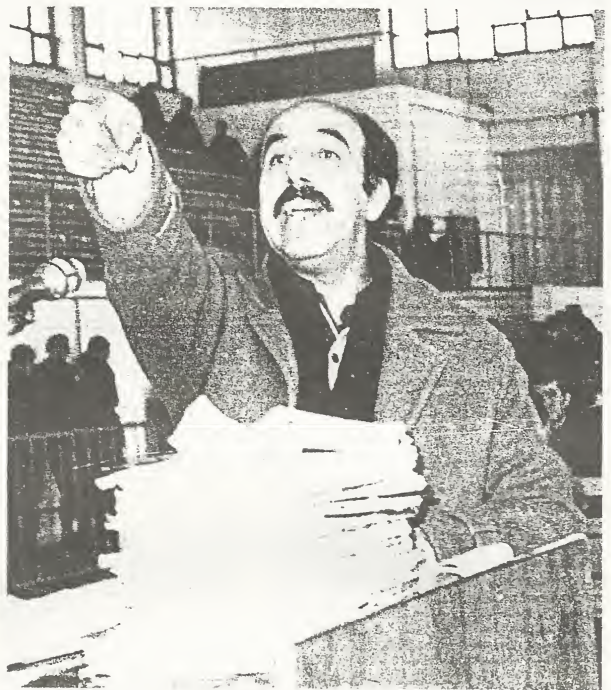
9月12日／革命的労働者運動はウルカンラルの銀行を火炎ビンで攻撃し炎上させる。デブリムジ・ハルク・ゲチュレリ（DHG／革命的人民勢力）はフランス政府に抗議声明を送る。

9月13日／イスタンブールのカディコイ広場でカラタシ釈放を求める横断幕を掲げる。イギリス大使館の壁に抗議のスライドを映写。アイディン刑務所のデブ・ソル政治囚が抗議声明を発表する。

9月15日／イスタンブール最大のスラム、ガジ・マハレシでDHGは火炎ビンによって通りを封鎖し「真の判決は人民が下す」と書いた横断幕を掲げる。

9月16日／サグマリカルとカグラヤンで、DHGが主要道路を火炎ビンを投げて封鎖。横断幕を掲げる。

9月17日／DHGはガブゼで3ヵ所、イスタンブール



で2ヵ所、道路を封鎖してデモを行なう。

9月19日／アダナで、「我等の革命的炎はフランスでも燃えるだろう」と書かれた横断幕を掲げてデモ。

9月21日／DHGは再度デモを組織する。アンタクヤとサマンガでもデモが行なわれる。DHGは「我らは自らの血で歴史を書き記している。我々は銃弾によって歴史を書き記しているのだ」との声明を発表。デブ・ソル以外の政治囚も国家保安法廷に対して声明を出す。アイディン、サカルヤ、カナッカレ、ブルサ、ブカのデブ・ソル政治囚もハンストに合流。TIYAD（政治囚家族会〜救援組織）はサグマルチラル刑務所の前でデモを組織する。「我が指導者、同志達、息子たち万歳！」と書かれた横断幕を掲げるデモ隊に対し警官隊が弾圧を加え、老人を含む多数が負傷し、逮捕された。

9月22日／デブ・ソルは、イスタンブールのレベントにあるルノー社（フランス系企業）の事務所を爆破した。「これはフランス政府への警告である」との声明が出される。

9月23日／イスタンブールで最も貧しい地域であるバイラムパシャの住民らは、道路を封鎖し、カラタシの肖像を描いた横断幕を掲げてデモを行なう。

9月27日／リセリ・デブ・ゲンチュ（革命的青年の高校生部門）はイスタンブールの「ヒュルリエット」（政府系新聞）事務所を破壊する。

9月28日／デブ・ソルは、イスタンブールのルノー社事務所に横断幕を掲げる。これには爆弾がセットされて

いたため、処理されるまでの数時間にわたって外せなかった。

10月3日／ヨズガトゥの政治囚たちはフランス政府にカラタシの釈放を求める書簡を送る。

10月6日／イスタンブールの10ヶ所以上の地区で「自由の灯火」がともされ、旗が掲げられる。

10月7日／アンカラのセベジで、爆弾付きの横断幕が掲げられる。

【ヨーロッパなど】

ヨーロッパなどには 300万人以上のトルコ人が居住しており、抗議運動も各地で繰り広げられた。逮捕直後にデブ・ソルのヨーロッパ代表部は以下の声明を出している。「フランス政府は、カラタシを逮捕したことで政治的な過ちを犯した。フランス政府は、我々の怒りを押し量ることは決して出来ないだろう。我々はヨーロッパと中東に定着した組織である。もし、我が指導者同志が危害を加えられたり、長期にわたって拘留されるのなら、我々はこれに報復するだろう」。

9月12日／ロンドンのフランス大使館前でデモ。抗議文を手渡す。ウィーンのフランス大使館前でもデモが行われ、「フランス政府は、トルコ人民に対して終わりのなき戦争を引き起こしている」との警告を行なった。アムステルダムでのフランス領事館前でもデモが行なわれた。

9月13日／アテネで、デブ・ソルの旗とカラタシの肖像を掲げた大規模なデモ。フランス大使館に「もし、カラタシが傷つけられたら、我々は報復する」との抗議文を手渡した。同日、ブリュッセルでもデモが行なわれ、欧州議会の広報センターで記者会見が行なわれる。

9月19日／DHGは、ケルンの陸橋にカラタシの肖像を描いた横断幕を掲げる。

9月21日／ボンのフランス領事館前でデモ。警察の弾圧をはね除けて貫徹される。

9月23日／パリとケルンでは、多数のポスターが街頭に張り出され、壁にはスローガンが書かれる。

9月24日／フランス緑の党代表のユブス・クロシェはフランスのバラデュール首相に抗議の書簡を送る。

9月27日／フランス共産党代表は、内相に抗議文を送る。

9月28日／パリ中心部のシャトレ広場で大規模なデモが行なわれる。戦闘的な活動家は広場の彫刻に自らの身体を縛りつけて、抗議を行なう。



火炎ビンを投げながら抗議デモ（トルコ）

9月30日／アテネで、トルコとクルディスタンの組織が共同でデモを組織。フランス国旗を焼いて抗議する。

10月18日／ベルリンでは、RAF（ドイツ赤軍派）のイルムガルト・ミュラーとカラタシの釈放を求めるデモ。デモは、ミュラーが収容されているモアビット刑務所まで行なわれる。

カラタシの収容されているフランスのラ・サンテ刑務所には、彼の安否を気づかって毎日献花がなされている。フランスでは、カラタシ釈放国際委員会が、ドイツ、オランダ、イギリスからの仲間を迎えて結成され、釈放要求の署名運動を全世界的に展開している。これには、既に多くの革命組織や人権組織などから署名が寄せられている。署名した主要な組織と個人は、以下の通り。

中東／PFLP（パレスチナ解放人民戦線）、PFLP-GC（パレスチナ解放人民戦線総司令部）、イスラム聖戦、PLF（パレスチナ解放戦線）、シリア共産党
ギリシャ／労働組合連合委員長

ドイツ／緑の党書記長、PDS（民主社会党）ヴェッペルタール支部、ダルムシュタット学生組合、ルール地方学生組合、ノルトライン・ヴェストファリア地方トルコ教師組合

スウェーデン／マルクス・レーニン主義共産党

フランス／CNT（全国労働連合）郵便労働者部門、
エーリッヒ・ホーネッカー連帯委員会

オーストリア／緑の党ウィーン支部

イギリス／労働党国會議員～J・コルベイン、M・ワトソン

南アメリカ／キューバ共産青年同盟議長、FMLN、FSLN、MPP（ペルー人民運動）、アフロ・アジア人民連帯組織議長、AALA人民連帯運動議長、チリ政治囚連帯委員会

デブ・ソル・ギュチュレル声明

「人民の指導者カラタシを直ちに釈放せよ」

革命運動と愛国的解放運動への帝国主義の抑圧は、よく知られるところである。今日、帝国主義勢力は、再び我が運動と全世界の反帝勢力へ攻撃を加えた。

民主国家を自称するフランスは、帝国主義の組織的人権侵害に貢献した。フランスは、その領内で、我が指導者カラタシに対し、この侵害を犯したのである。彼は、イタリアからフランスへ入国しようとしていた時に逮捕され、収監された。これにはとどまらず、直ちにフランスは、カラタシのトルコへの送還について、トルコ政府と取り引きを行なっている。

トルコの状況、すなわち、即決処刑、拷問、組織的人権侵害、行方不明、そしてありとあらゆる抵抗への弾圧は、良く知られている。

トルコ・ファシスト国家への我が指導者の追放措置は、結果として人権侵害を不可避とする。

再び言う。デブ・ソルは、その指導者と固く結合した人民運動である。トルコ・ファシスト国家も帝国主義も、

デブ・ソルの破壊に成功しはしないだろう。

それゆえ、帝国主義もしくはトルコ国家は、この攻撃によって何も得ることはないであろう。

ここに我々は、全ての進歩的人民、革命家、民主主義者、そして民主的大衆組織に対して、国際連帯を呼びかける。

帝国主義打倒！

人民の国際連帯万歳！

人民の指導者カラタシを釈放せよ！

我々が指導者カラタシ万歳！

我々は正義だ！我々は勝利する！

デブリムジ・ソル・ギュチュレル

(革命的左翼勢力／デブ・ソルの公然組織)

デブ・ソル声明

「帝国主義に革命家を裁く権利はない」

フランス政府は、我が人民解放闘争の指導者を逮捕することによって危険なゲームを行なっている。歴史は、何度も彼らに警告した。我々もまた、警告するものである。歴史書は、支配と搾取に依拠する秩序を保持せんとする、支配階級と国家の多くの策動について、我々に告げている。彼らは、何十万もの人々を「秩序の法廷」で裁き、判決を下した。同じ歴史と法廷は、この抑圧の敵対者である被抑圧人民の闘い、そして人民解放運動の指導者の目撃者でもあった。帝国主義は、この歴史から学んではいない。彼らに希望はなく、恐怖の内に日々を送っている。世界の至る所で、例えばメキシコで、中東で、トルコで、クルディスタンで、反帝解放闘争が、日々より広範に、かつ強力に行なわれているからである。

トルコクルディスタンでの人民解放戦争の指導者の逮捕と監禁は、帝国主義者の絶望の結果なのである。我々の指導者を「テロリスト」「犯罪者」と非難する者たちは、おのれの姿を鏡で見るが良い。人民と人間性に対して犯した罪に満ちた自らの歴史を、彼らは見ることとなろう。帝国主義裁判官たちの手は、被抑圧人民の無事の血で覆われているのである。全世界の人民は忘れていないし、決して忘れることはないだろう。アルジェリア、イラク、レバノン、チャド、ソマリア、ルワンダなどで帝国主義者の犯罪を。我々ははっきりと覚えている。



非合法であるデブ・ソルの旗を公然と掲げる (トルコ)



帝国主義者に革命家を裁く権利はない。自らが正しくなければ、裁くことはできないのだ。帝国主義の法は、不法、人間性への犯罪、歴史の捏造、そして人民抑圧と同義である。帝国主義とは、暴力の名であり、正義に値しない名である。このために、彼らは裁かれたのだ。彼らは、自身の法廷で革命家によって告発され、有罪を宣告されたのである。これによって、彼らは何度も打ち倒されたのだ。

フランス帝国主義は、彼ら自身の市民「ドリフィス」に対する敗北を軽視しているようだ。ナチの法廷で、ドイツ・ファシズムに屈伏したジョージ・ディミトロフを、彼らは忘れているようだ。

帝国主義に革命家を裁く権利はない。帝国主義は、人民と革命家に対して犯した罪を決して贖えないだろう。人民解放のための指導者と戦士たちを裁く権利はない。

革命家たちは、独裁国家の法廷で、独立、民主主義、民族的尊厳、自由と社会主義が正しいことを主張した。彼らは、拷問、抑圧と虐殺にもかかわらず、あらゆる状況下において、抵抗の伝統を保持したのである。ファシズムは、革命家の闘いを妨げることはできなかった。革命家は、敗北しなかったのである。敗北するのは、帝国主義の方なのだ。

フランス政府は、民族の尊厳、第2次世界大戦での対ファシズム抵抗運動のどちらをも、代表するものではない。カラタシとその友人たちの逮捕によって、彼らは、フランス占領に抵抗せずにパリから逃げだしたベタイン将軍の協力者となったのである。フランスの真の代表者たちは、ファシズムと帝国主義と闘う者たちなのである。国の尊厳のために。

我々は、抵抗の精神を持つ人々、すなわちジュリオット・クーリエのような反ファシスト、共産主義者のジョルジュ・ポリツェール、ポール・エラードなどの人々の尊厳を思い浮かべるのである。我々は、あらゆる戦線でファシズムと帝国主義に抵抗する我が労働者階級の、唯一の希望なのだ。我々は人民の運動そのものである。我々は、待ちはしない。我々は、言ったことは、どんなことでもやってきた。あらゆる手を尽くして来た。我々はあまたいるのだ。我々は正義であり、勝利する。

デブリムジ・ソル (革命的左翼)

7月20日トルコ・ゼネスト報告

プロレタリアは、国家の経済的テロルにゼネストで抵抗した。7月20日、トルコ・プロレタリアートは全土をマヒさせたのである。

IMFの要求によって、トルコ政府は昇給を据え置き、国営企業数社を閉鎖した。この事態は、「4月5日基準」として知られる経済基準によって引き起こされた。それらの基準は、大量解雇、大規模な民営化、給与の凍結、所得減少をとまっていた。

チルレル政府のもたらした「4月5日基準」の後、デブリムジ・ソル・ギュチュレル（革命的左翼勢力/デブ・ソルの合法部門）は「窮乏と抑圧に対し立ち上がる」キャンペーンを始めた。このキャンペーンは全土からの支持を得た。その、今までで最大の成果が、7月20日に現れたのである。400万のプロレタリアートが職場放棄を行なった。国の輸送部門はマヒした。全土でデモが行なわれたのである。

人民の要求は、なによりもまず復職、加えて民営化の阻止、公務員のストライキの権利、組合加入の権利。IMFのような帝国主義者の権力による人民の搾取を止めることであった。人民の生活への攻撃を狙う反民主的基準を、終了させるようにも要求した。

7月20日以前、政府と TURK-İS、HABER-İSといった御用組合は、労働者階級を脅迫しようとした。彼らは、7月20日のデモに参加しないように通告したのである。家

ゾングルダック



に留まるようにと。しかしながら、労働者は「我々は労働者である。我々は正義である。我々は勝利する！」のスローガンをもって、大挙してデモに参加したのであった。

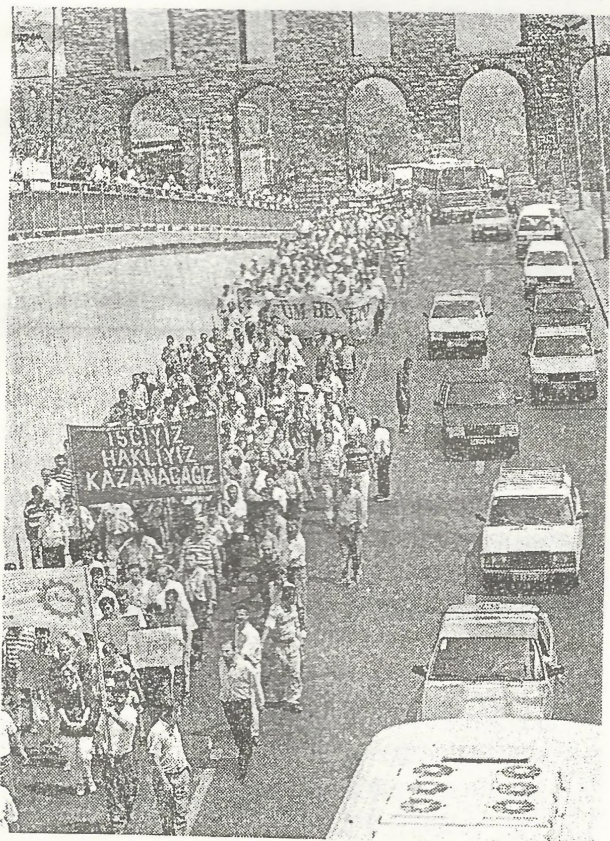
これら「4月5日基準」はこの国の人民を跪かせようとするものである。ゆえに我々は、行動を強めなければならない。人民は現連立政府を放逐することを目的としなければならない。我々は、誰がこの国の主人なのか、示さなければならないのだ。

【イスタンブール】

7月20日、庶民生活は停止した。多数の一般企業の労働者、公務員、建設労働者、技術者、学生、弁護士、芸術家、スラム住民、そして商店主はデモを行なった。交通機関はマヒした。この公共基幹設備は、イスタンブールのような大都市にとってはとても重要なものである。ゆえに、全ての人々がストライキを痛切に感じるようになった。

デモは市議会前を出発した。何千もの人々がデモ行進に加わった。彼らを取り入れたスローガンは、「スト権を獲得しよう！ストライキが必要だ！」「我々は労働者だ！我々は正義だ！我々は勝利するぞ！」「貧困と抑圧に対し立ち上がろう！」であった。多くの通行人がデモに参加した。カサムパサ地区を出発した別のデモは、ウンカパニ橋で本隊のデモに合流した。この場所から、TBSに組織された公務員もデモに参加した。公共部門のISKIの労働者は、デモを組織して交通を止めた。彼らのスローガンは「解雇を止めよ！」であった。

EGİT（教員組合）とTSS（医療労働組合）はトプカピでデモを始めた。彼らのスローガンは「奴隷的制度打倒！」であった。全ての参加者はアクサライ広場で合流した。御用組合からの発言者が演説しようとした時、デモ隊はスローガンを叫んでこれに対抗した。グループ・ヨルム（音楽バンド）、OKM（文化センター）、エキン・サナト（文化センター）もデモを支持した。デモの終わりには、ユラムが演奏を行なった。



イスタンブール

カルタル地区では、別の大デモが起こった。地元タバコ会社とスラム地区からのデモ参加者に対して、警察は弾圧を加えた。

【アンカラ】

何千人ものあらゆる種類の工場からの労働者、公務員、学生がサカルヤ広場に結集した。同じ日、警察はケチオレン地区で別のデモ隊の行進を妨害した。

【イズミール】

2千人以上の人々がデモを行なった。彼らのスローガンは「我々は公務員だ！我々は正義だ！我々は勝利するぞ！」「貧困と抑圧に対し立ち上がろう！」であった。団結権もスト権もない公務員の50%もデモに加わった。

【ゾングルダック】

警察はデモを激しく攻撃した。デモは鉱山労働者記念碑の前を出発した。デモ隊には警察の挑発が加えられた。デモ参加者は「物価上昇、拷問と抑圧、これはファシズムだ！」と叫んだのであった。参加者たちは、市議会に向けて歩みを進めた。「イスチ・ハレケティ」（労働運動）紙の活動家たちは多数のパフレットを配付した。デモの最後に、警察は労働者を襲撃して10人を逮捕した。この内の一人は「イスチ・ハレケティ」紙の代表者であるナザン・イルマズであった。同紙のジャーナリスト、セザイ・オルジュも逮捕された。

【アダナ】

DISK労働組合に組織された労働者たちは、工場の前でデモを行なった。各公務員は、病院前で記者会見を行なった。ジュコビルリック労働組合の2千人の労働者は2時間の職場放棄を行なった。

【エスキシェール】

公共交通が止まった。病院は急患のみを受け付けた。御用組合に抗して、多数の労働者が1日の職場放棄を行なった。

【サムスン】

地方公務員たちは、半日ストを行なった。

【イスケンデルン】

鉄道労働者と港湾労働者が全日ストを行なった。鉄道は動かず、船舶は荷揚げも荷降ろしをできなかった。鉄鋼労働者たちは生産を1日止めた。

【メルシン】

2つの労働組合の3千人の労働者たちがデモを行なった。デモの間、警察は『ミュジャデレ（闘争）』紙（デ



イズミール



ブ・ソル／革命的左翼の新聞）の記者を逮捕しようとしたが、群衆によって阻止された。

この町ではテュルクIsの労働者の全ての労働者がストライキを行なった。公共交通と空港は閉じられた。飛行は不可能となった。

【トラブゾン】

公務員の80%が1日の職場放棄をした。

【ディヤルバクル】

多数の労働者、公務員が1日ストを行なった。警察はエルガニ・セメント工場を戦車で包囲した。

【ガジアンテップ】

1万5千人の労働者が職場放棄を行なった。民主協会と自治体労働者評議会からの5百人の人々は、市議会前で記者会見を行なった。

【アグリ】

3つの労働組合の合計千人の労働者が職場放棄を行なった。もちろん公務員は全てストライキを行なった。

【カルス】

全公務員がストライキを行なった。4つの労働組合が職場放棄を行なった。

※他の町で全公務員がストライキを行なったのは、バットマン、タンジェリ、ウルファ、シールト、マルディン、エラズィグ、シルナックである。

世界革命運動情報

BURST CITY
For Revolutionary Resistance

★発行 A. R. P

★連絡先 〒606 京都市左京郵便局私書箱57号
ARP

★FAX 075-781-1253

★定期購読料 10号分 3500円

★郵便振替口座

(新) 00920-0-252923 ARP

(旧) 大阪2-252923 ARP